

## 研究報告

## 看護学生の海外研修前後における異文化感受性の変化 (第2報)

戸田 登美子・丸 光 恵

### Changes in Cultural Sensitivity of Nursing Students between Before and After a Study Abroad Program: 2<sup>nd</sup> Report

TODA Tomiko and MARU Mitsue

**Abstract:**

**Background:** Recently, it has become necessary for nurses to improve their cultural sensitivity because of the increasing number of foreign patients. Therefore, we have established study abroad programs for nursing students.

**Purposes:** To clarify the changes in cultural sensitivity between before and after a study abroad program among nursing students.

**Method:** A self-administered questionnaire survey using the Japanese version of the Intercultural Sensitivity Scale was conducted before and after the study abroad program among 43 nursing students. The Intercultural Sensitivity Scale in Japanese is composed of 22 items with 3 subscales: 1) positive feelings toward different cultures; 2) ambivalent feelings toward different cultures, which includes confidence, enjoyment, anxiety, and avoidance of different cultures; and 3) negative feelings toward different cultures, with a higher score indicating greater cultural sensitivity.

**Results:** The total score and scores in the positive feelings toward different cultures and ambivalent feelings toward different cultures subscales were significantly increased after the program. There were no significant differences in the negative feelings toward different cultures subscale scores.

**Discussion:** The results showed that the study abroad program increased the cultural sensitivity of the students; however, some students did not display reduced negative feelings toward different cultures. The findings also suggest the necessity of educational support for students to reflect on their experiences from different viewpoints.

**Key Words:** Cultural sensitivity, Study abroad program, Nursing students

**抄録:** 近年、日本の外国人患者の増加に伴う医療のグローバル化が進んでいる。看護師も異文化感受性を高めることが求められており、本学ではそのような教育の一環として海外研修を実施している。そこで、海外研修の前後における異文化感受性の変化を明らかにする目的で調査を行なった。日本版異文化間感受性尺度を研修前後に測定し、有効回答数は43名であった。同尺度は、「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」、「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」、及び「Ⅲ. 異文化への否定的感情」の下位尺度で構成され、得点が高いほど異文化感受性が高いことを示す。その結果、合計得点、「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」及び「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」において研修後に得点が有意に増加したが、「Ⅲ. 異文化への否定的感情」では有意な得点増加がみられなかった。以上より、海外研

修により異文化感受性は高まるが、自文化中心主義を示す異文化への否定的感情が低減しない学生の存在が示唆された。また、更なる異文化理解に向けて、自己と異なる視点から研修での体験を捉え直す教育的関わりの必要性が示唆された。

キーワード：異文化感受性、海外研修プログラム、看護学生

## I. はじめに

2018年の国内の在留外国人数は240万人超(法務省, 2019)、訪日外国人旅行者は3,119万人に達した(日本政府観光局, 2019)。その結果、医療機関を利用する外国人も増加傾向にあり、看護師の異文化感受性を高めることが求められている。医療機関における外国人患者対応は喫緊の課題であり、国内の6割近くの看護系大学において海外研修が実施され、看護学生の異文化理解に効果があると報告されている(蛭田, 2017)。

本学においても看護学生の異文化感受性を高めるため2015年より2週間の海外研修を実施している。海外研修プログラムは、看護英語のレッスン、医療や看護に関する講義、現地学生との合同演習や医療施設の見学等で構成されている。また、その目的を、海外の歴史や文化、生活習慣を体験的に学び国際感覚を涵養すること、現地大学における看護教育を通して医療や看護について理解を深め、専門職英語運用能力の強化を図ることとしている。

異なる文化をもつ患者の看護には、その文化に適した看護を提供する能力、異文化看護能力が必要である。異文化看護能力の獲得には、文化の差異への気づき、文化に関する知識や技術に加え、異文化感受性を高める必要があるとされる(Papadopoulos, 2004)。

なお、本稿は、甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編第12号に掲載された「海外研修前後における異文化間感受性の変化」の第2報である(戸田, 2018)。今回、2017年以降に実施された看護学科主催の全ての海外研修の参加者を対象に、海外研修前後における異文化感受性の変化について継続調査を行った。その結果、海外研修が参加者に及ぼす異文化感受性の変化について新たな知見が得ら

れたので、ここに報告する。

## II. 目的

本研究の目的は、本学の看護学生の海外研修の前後における異文化感受性の変化を明らかにすることである。

## III. 方法

### 1. 対象者

2017年2月から2019年3月までに実施された計5回の看護学科主催の英国または豪州への海外研修の参加者を対象とした。

### 2. 期間

2017年2月～2019年3月に実施した。なお、質問紙調査は海外研修の開始1週間前から終了1週間以内に行い、インタビュー調査は終了後1ヶ月以内に実施した。

### 3. 方法

海外研修前に研修参加者に研究の概要について説明し、研修前及び後に自記式質問紙調査を行った。また、インタビュー調査は質問紙調査の結果を補完するために実施し、プライバシーの守れる個室にて行い、要した時間は1回30分～60分であった。なお、インタビューの内容は逐語録に起こし、対象者毎に異なる文化や人々との関わりに関する発言に注目してまとめ、質問紙調査との関係について分析を行った。

### 4. 調査項目

質問紙調査は、日本語版異文化間感受性尺度(Intercultural Sensitivity Scale: 以下、日本語版ISS) 22項目と、学外で外国人と会う機会及び得意な外国語の有無、渡航経験等に関する自作

の項目を含む計 34 項目とした。

**1) Intercultural Sensitivity Scale (以下 ISS) :** 2000 年に Chen 及び Starosta によって開発された異文化に対する感受性を測定する尺度で, Interaction Engagement, Respect for Cultural Differences, Interaction Confidence, Interaction Enjoyment, 及び Interaction Attentiveness の 5 つの下位尺度の全 24 項目からなる (Chen, 2000)。各項目を「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の 5 件法で測定し, 得点が高いほど文化差に対する肯定的な感情が高いことを示す。2016 年に鈴木が ISS を翻訳し, 翻訳版の妥当性, 信頼性の検証を行って原版 24 項目中 2 項目を除外し, 「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」, 「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」, 及び「Ⅲ. 異文化への否定的感情」の 3 つの下位尺度の全 22 項目で構成される日本語版 ISS を作成した。

なお, 「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」は, 文化の差異を積極的に知ろうとしたり, 差異を楽しんだりといった異文化に対する肯定的な感情, 「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」は, 文化の差異に対する不安や緊張と, 自信と喜びといった相反する感情, 「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は, 異文化への否定的で自文化中心的な感情を示す (鈴木, 2016)。

**2) 異文化の感受性を測定する他の主な尺度と日本語版 ISS 選択の根拠:** 異文化の感受性を測定する他の主な尺度として, Hammer 及び Bennett が 1998 年に開発し, 日本語版も開発された異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory; 以下 IDI) がある (山本, 2002)。これは個人の異文化に対する認知, 感情及び行動の発達度を 6 段階で測定し, 前半 3 つの段階を自文化中心的段階, 後半 3 段階を文化相対的段階に分類した尺度である。しかし, 同尺度の元になった異文化感受性発達モデル (The Developmental Model of Intercultural Sensitivity, 以下 DMIS) の日本人への適用に対しては, 日本人から収集したデータが一部のカテゴリーに全く当てはまらなかったことが指摘されている (山本, 2014)。また, 日本人を対象とした IDI の結果においては, 下位尺度の内的整合性が低かったことも明らかになっており (山本, 2002), DMIS 及び IDI の日本人

への適用には検討の余地があるとされている。そのため, 本研究では, 日本人への適用においても信頼性及び妥当性が検証されている日本語版 ISS を用いた。

**3) インタビュー調査:** 1. 外国・外国人に対する印象や考え, 2. 海外研修中の外国人との関わりで印象に残っていること, 3. 外国人患者への関わりについての考えの 3 項目について尋ねた。

#### Ⅳ. 倫理的配慮

対象者には, 本研究の目的や内容, 方法及び個人情報厳守すること, 本研究への参加は自由意思であり, 参加に同意した後でもいつでも辞退できること, 参加辞退によって不利益を被らないこと等について, 文書を用いて口頭で説明を行った。その後, 同意の得られた対象者から同意書を受領した。なお, 本研究において利益相反は一切なく, 甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。(研究倫理審査承認番号 20161025)

#### Ⅴ. 結 果

海外研修の参加者は延べ 58 名であった。うち 3 名は海外研修に複数回参加していたが, 海外研修の種類, 参加した学年が異なるため, 参加した回数を延べ人数として計上した。

質問紙調査の回収数は 54 名 (93.1%) であり, そのうち無回答を除外した 43 名を分析対象とした。また, インタビュー調査は, 同意が得られた 22 名 (37.9%) を対象とした。

##### 1. 対象者の属性

対象者 43 名の内訳は, 各海外研修の参加者は 5~12 名, 学年は 1 年生が 29 名, 3 年生が 10 名, 4 年生が 4 名であった。なお, 2 年生は海外研修が実習期間と重複しており, 参加できないため 0 名であった (表 1)。また, 海外研修以前に渡航歴を有した者は 34 名 (79.1%), 渡航歴が無かった者は 9 名 (20.9%) だった。

表1 海外研修及び各学年の参加者 n=43

研修年・国	1年生	3年生	4年生	合計
2017 英国	2	3	0	5
豪州	5	0	2	7
2018 英国	4	6	2	12
豪州	9	0	0	9
2019 英国	9	1	0	10
合計	29	10	4	43

## 2. 日本語版異文化間感受性尺度(日本語版ISS)の得点

### 1) 対象者全員の海外研修前後の変化

Shapiro-Wilk の正規性検定の結果, 研修前後の合計得点及び下位尺度の一部が正規分布を示さなかったため, Wilcoxon の符号付き順位検定を実施した。なお, 分析には IBM SPSS Sta-

tistics 25 を用いた。

海外研修の渡航先の種類によって対象者を2群にわけ, 日本語版 ISS の合計得点及び, 下位尺度得点を比較したがいずれも有意差は認められなかった。また, 参加学年及び渡航歴の有無においても, 合計得点, 全下位尺度の得点の有意差はなかったため, 対象者を群分けせず分析を行った。

対象者全員を対象とした日本語版 ISS の合計得点の平均値は, 研修前が 80.79 点 (min = 66.0, max = 98.0, SD = 7.40), 研修後 88.88 点 (min = 74.0, max = 104.0, SD = 8.64) であり, 研修後に有意に得点上昇が認められた(表2)。また, 全 22 項目の平均点は研修前 3.67 (SD = 0.34) 点, 研修後 4.04 (SD = 0.39) 点であった。

表2 日本語版異文化間感受性尺度(日本語版ISS)海外研修前後の得点

n=43

質問項目		研修前 平均	SD	研修後 平均	SD	P
I 異文化への肯定的感情	1. 私は, 文化的に異なる人々とかかわるとき, できるだけその人について知ろうとする。	3.77	.72	4.42	.76	**
	2. 私はたいてい, 自分と文化的に異なる人とかかわるとき, 肯定的に対応している。	3.84	.57	4.28	.55	**
	3. 私は, 文化的に異なる人々に対して気遣いをする。	3.98	.51	4.26	.66	**
	4. 私は, 文化的に異なる人々の振る舞いや慣習を尊重する。	4.07	.46	4.47	.59	**
	5. 私は, 自分と文化的に異なる相手との間にある違い(差異)について, 楽しめる。	3.98	.67	4.47	.63	**
	6. 私は, 文化的に異なる人々の価値観を尊重する。	4.12	.50	4.56	.55	**
	7. 私は, 文化的に異なる人々とかかわるとき, うちとけた感じでありたいと思っている。	4.19	.66	4.65	.53	**
	8. 私は, 自分とは文化的に異なる人とかかわっているとき, その人が伝えようとしている小さな事にも気を配る。	3.81	.70	4.23	.57	**
	9. 私はたいてい, 自分と文化的に異なる相手に対して, 言語的, 非言語的に自分の理解を示す。	3.67	.68	4.28	.59	**
	10. 私は, 文化的に異なる人々に対するある種の印象(偏見など)を持たないようにしている	3.95	.69	4.09	.68	
小計		39.37	3.46	43.70	4.09	**
II アンビバレントな感情	11. 私は, 文化的に異なる人々とうまくかかわる自信がある。	2.91	.87	3.51	.88	**
	12. 私は, 文化的に異なる人々と, うまくかかわれると確信している。	2.63	.73	3.26	.90	**
	13. R 私は, 文化的に異なる人々とかかわるとき, 緊張しやすい。	2.00	.66	2.51	1.03	**
	14. R 私は, 文化的に異なる人々を前にすると, 話しぶりと思う。	2.40	.93	2.93	1.03	**
	15. R 私は, 自分と文化的に異なる人々と関わらなければならない状況をできるだけ避ける。	3.58	.85	3.72	.77	
	16. 私は文化的に異なる人々とかかわるのが楽しい。	3.81	.76	4.23	.53	**
	17. R 私は, 文化的に異なる人々とかかわることが, 好きではない。	4.23	.61	4.42	.50	*
小計		21.56	3.89	24.58	4.07	**
III 否定的感情への異文化	18. R 私は, 文化的に異なる人々に対して, がっかりすることがよくある。	3.86	.77	4.02	.80	
	19. R 私は, 文化的に異なる人々は, 心が狭いと思う。	4.09	.72	4.44	.67	*
	20. R 私は, 文化的に異なる人々の意見(考え)を受け入れられないだろう。	4.14	.64	4.37	.58	*
	21. R 私はしばしば, 文化的に異なる人々とかかわることは, 自分にとってあまり役にたたないと感じる。	4.40	.66	4.53	.67	
	22. R 私は, 自分の文化は他の文化よりも優れていると思う。	3.37	.90	3.23	1.09	
小計		19.86	2.38	20.60	2.41	
合計		80.79	7.40	88.88	8.64	**

R のついた項目は逆採点項目を示す, \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

下位尺度「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」は、研修前 39.37 点（min=30.0, max=47.0, SD=3.46）から研修後 43.70 点（min=35.0, max=50.0, SD=4.09）, 「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」は研修前 21.56 点（min=13.0, max=31.0, SD=3.89）から研修後 24.58 点（min=15.0, max=33.0, SD=4.07）, 「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は研修前 19.86 点（min=15.0, max=25.0, SD=2.38）から研修後 20.60 点（min=15.0, max=25.0, SD=2.41）へと、全ての下位尺度において研修後に点数の増加がみられた。なお、下位尺度「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」及び「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」において有意差が認められたが、「Ⅲ. 異文化への否定的感情」では有意差は認められなかった。

「Ⅲ. 異文化への否定的感情」の計 5 項目のうち、研修前後の得点で有意差がみられなかったものは、「私は、文化的に異なる人々に対して、がっかりすることがよくある」, 「私はしばしば、文化的に異なる人々とかかわることは、自分にとってあまり役にたたないと感じる」及び「私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う」の 3 項目であった（いずれも逆転項目）。このうち、「私はしばしば、文化的に異なる人々とかかわることは、自分にとってあまり役にたたないと感じる」は、研修前の点数が 4.40（SD=0.66）点、研修後が 4.53（SD=0.67）点と、全項目の平均点（研修前 3.67 点、研修後 4.04 点）より高かった。

## 2) 合計得点の増加の程度による異文化感受性の変化

研修後の日本語版 ISS の合計得点の増加の程度に応じて四分位に分け、研修後の点数増加が大きかった上位 25%（n=11, 学生 A~K）を上位群、下位 25%（n=11, 学生 L~V）を下位群とした（図 1-8）。

上位群の研修後の合計得点の増加は 13.0~30.0 点、下位尺度「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」は 3.0~14.0 点, 「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」は 3.0~12.0 点, 「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は -1.0~7.0 点であった。

下位群の研修後の合計得点の変化は -8.0~+2.0 点、下位尺度「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」は -3.0~+7.0 点, 「Ⅱ. 異文化へのアン

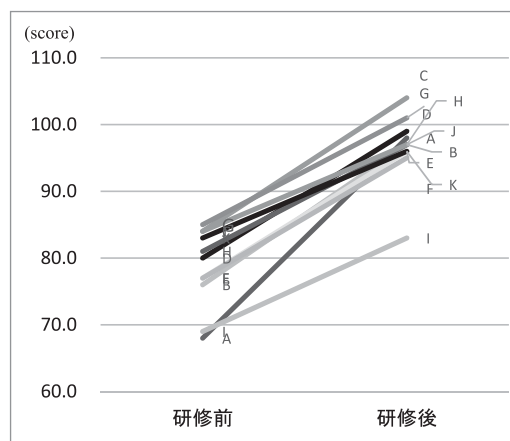


図 1 合計得点 上位群 n=11

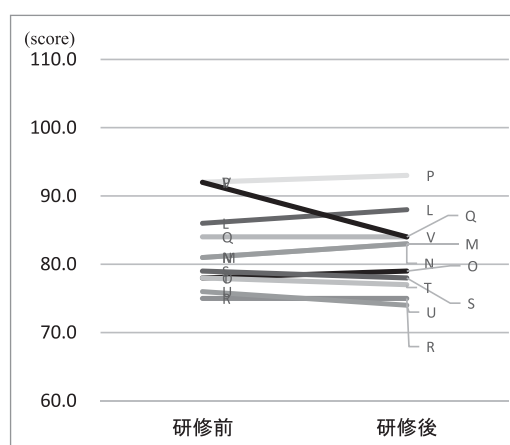


図 2 合計得点 下位群 n=11

ビバレントな感情」は -2.0~+3.0 点, 「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は -5.0~+3.0 点であった。なお、「Ⅲ. 異文化への否定的感情」において、得点が増加したのは下位群 11 名中 1 名のみであり、減少したのは 7 名、変化がなかったのは 3 名であった。

## 3) 上位群及び下位群の海外研修後の感想

研修後のインタビュー調査より、学生らは言葉の壁や環境の違いから日々の生活で不安や緊張を感じていた発言が聞かれた。しかし、そのような困難な状況において、学生たちはホストファミリーや現地の人々と意思疎通を図ろうと努力し、会話が通じたり、親切な対応を受けて喜ぶ発言が聞かれた。また、日常生活を送る中で文化の差異に驚き、日本で生活する外国人の思いを推察したり、関わり方について振り返る発言もあった。

また、上位群および下位群について、文化が異なる人々との関わりや文化の差異に関する語

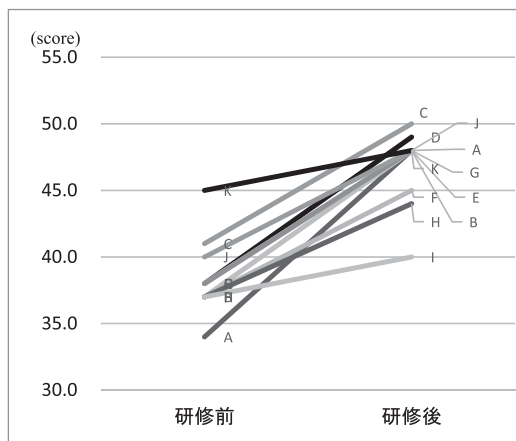


図3 I. 肯定的感情 上位群 n=11

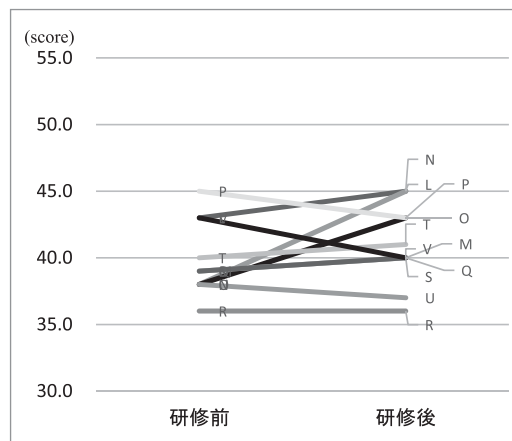


図4 I. 肯定的感情 下位群 n=11

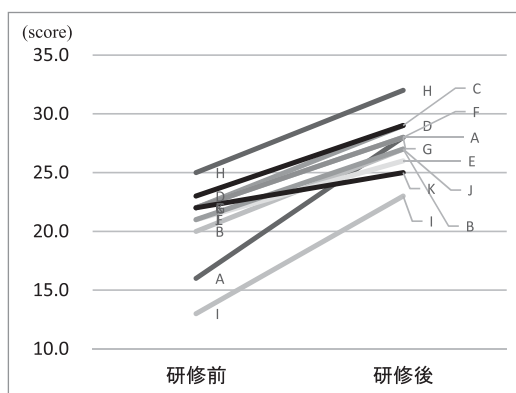


図5 II. アンビバレントな感情 上位群 n=11

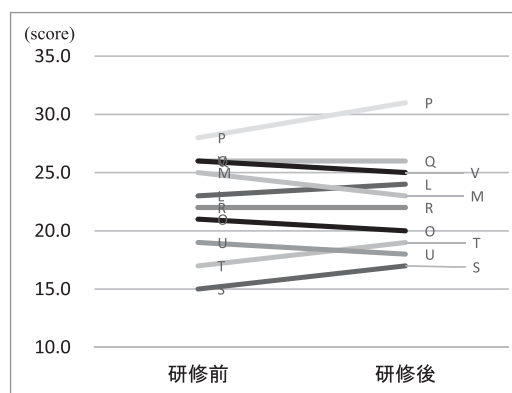


図6 II. アンビバレントな感情 下位群 n=11

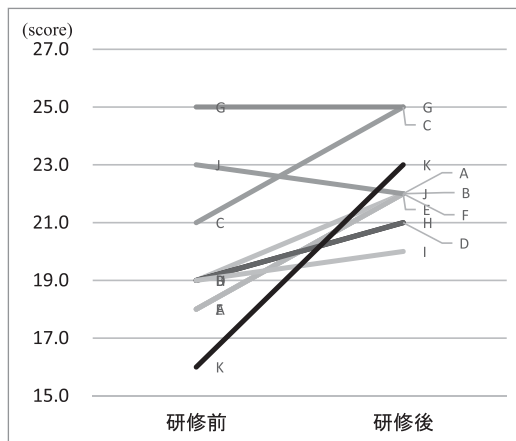


図7 III. 否定的感情 上位群 n=11

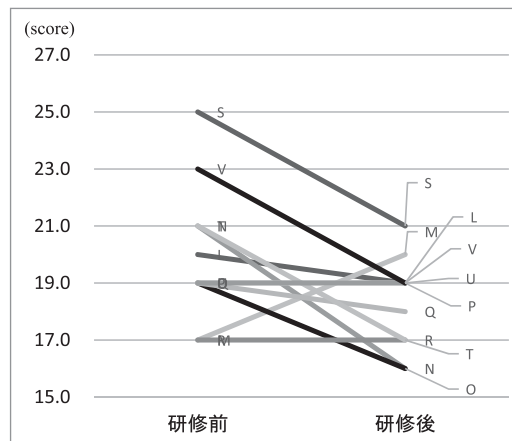


図8 III. 否定的感情 下位群 n=11

りに着目し、対象者ごとにまとめた。以下に、海外研修の経験を表す一文を表題とし、その概要を記す。

**上位群 文化の異なる人々への対応に思いを巡らせた学生 B**

立ち寄ったカフェで歓迎されて嬉しいと感じ、「自分も日本に来てくれた人に、そういう

気持ちになってもらいたい」と話した。また、その地域や文化に応じた振る舞いを身につけなければ、相手に「不快な思いをさせ」るため、そうならないよう留意する一方、「その人が伝えたいことをキャッチ」し、それを「引き出せるような関わり方が英語を通してできたらいい」と話した。

### 上位群 文化の差異への気づきから外国人の視点について考えた学生 K

ホスピス見学時に「清潔（を保つに）はシャワーで、浴槽に浸かるのは心のケア」との説明を聞き、文化の差異に驚くとともに、患者は「日本人という、自分の看護」の前提について「疑問も抱かずにきて」いたと語った。

しかし、研修後に外国人の行動には文化に根ざした「意味がある」のではないかと気づき、外国人の視点からみると、日本の文化や習慣について「疑問に思う」のではないかと話した。

### 下位群 文化の差異について具体的な発言がなかった学生 M

ホームステイについて「良くしてくれました」と語り、印象に残った会話について「覚えていない」、日本のお土産を渡した時は「まあまあ喜んでくれ」たとのみ語った。質問を重ねても印象を具体的に語ることは困難であり、文化の差異等についての発言は聞かれなかった。

## VI. 考 察

### 1. 海外研修が異文化感受性に及ぼす影響

海外研修後に日本語版 ISS の合計得点及び下位尺度「Ⅰ. 異文化への肯定的感情」及び「Ⅱ. 異文化へのアンビバレントな感情」において得点が有意に増加した。学生は海外研修中の文化の差異に対して、楽しみや喜び、不安や緊張など様々な感情を覚えつつも、研修後は文化の差異に対する肯定的な感情が強化されたことが明らかとなった。

また、日本語版 ISS の得点において、海外研修の種類、参加学年、及び渡航経験の有無による有意差は見られなかった。このことより、海外研修はその種類、参加者の学習進度や海外渡航のレディネスに関わらず、海外研修の参加自体が学生の異文化感受性の向上に効果があるといえる。本学科の海外研修は、高校の修学旅行や観光旅行とは異なり、医療施設の見学や現地学生との合同演習などで構成されている。現地の保健医療専門職や学生と交流しながら、学生たちは海外の医療や看護について理解を深め、ひいては自身の看護について振り返る機会となっていると考える。

海外研修において学生は、異なる文化や言語

に曝露されることで不安や緊張状態に置かれる。そのような状況で学生は文化の差異に気づき、その気づきを基に、互いの文化を関連付けて文化に対する認識の枠組みを変容させているとされる（小林, 2013）。本研究では、学生は研修中に様々な事柄や感情を体験し、それを元に日本に住む外国人の立場を推測したり、日本の文化を異なる視点で捉え直すという視点の転換を試みた者もいた。その基には、異文化への肯定的感情に結びつく文化の差異への気づきがあったと考えられる。異文化感受性をさらに高めるためには、学生が文化の差異に気づくだけでなく、その気づきを肯定的な感情に転換する必要があると思われる。

### 2. 学生の異文化に対する認識と異文化への否定的感情

日本語版 ISS の下位尺度「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は、異文化への否定的で自文化中心的な感情で構成される（鈴木, 2016）。この下位尺度において研修後に有意な得点増加がなかったことから、海外研修に参加しても自文化中心的な感情が低減しない学生の存在が示唆された。

日本語版 ISS の下位尺度「Ⅲ. 異文化への否定的感情」は、自らの価値観とは異なる文化の価値観の受け入れ難さ、自文化への優越感、すなわち自文化中心主義的傾向の高さを測定するものである（鈴木, 2016）。異文化間の対人場面においては、社会的承認の柔軟性や適応能力が関連するとされている（Chen, 2000）。しかし、既存研究においては、3つの下位尺度のうち「Ⅲ. 異文化への否定的感情」のみ、社会的承認尺度や周囲の状況に応じた適応の程度を示すセルフモニタリング尺度との関連がみられなかったと報告されている（鈴木, 2016）。これらより、学生が異なる文化や環境に適応していても、自文化中心主義から脱却せず、異なる文化の価値観を受け難い場合があることが推測される。

自文化中心主義から文化相対主義への移行には、文化の違いを咀嚼、吸収し、自己の枠組みを捉え直したり、複数の枠組み間を往来したりする経験が必要である。そうすることによって、異なる見方から経験を再構築することが可

能となる(山本, 2014)。また, 学生が自らの体験を複数の視点や比較の枠組みから捉え直すにはデブリーフィングが効果的と言われている(工藤, 2009)。学生は, 研修中の体験を他の参加者や教員と語ることで, 事象の背後にある文脈に気づき, 自身の経験を異なる視点から捉え直すことができる。学生が, 楽しかった, 驚いた等の感情や, 文化が違って適応できたといった感想に終始せず, これらの経験を糧として, 物事や人との関わりについてより理解を深められるような教育的関わりが必要である。

## Ⅶ. 結 論

1. 学年や渡航歴に関わらず, 海外研修に参加することによって異文化感受性が高められるが, 異文化への否定的感情が低減しない学生が存在することも示唆された。
2. 異文化感受性を高めるためには, 学生が文化の差異に気づき, その気づきを肯定的な感情に転換する事が必要である。
3. 自文化中心的な感情が低減しない学生に対して, それらの感情の元となった体験から文化の差異に対する認識を捉え直し, その体験を再構築できるような教育的関わりが求められる。

## Ⅷ. 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として, 質問紙調査の対象者が43名, インタビュー調査が22名と少なく, 研究に参加しなかった学生によるバイアスが生じていると考えられる。今後は異文化に対する否定的な感情の発生要因について質的側面からも検討を加え, 教育的な関わりについて検討していくことが求められる。

## 謝辞

本研究にご協力頂いた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (2000). The Development and Validation of the Intercultural Sensitivity Scale. *Human Communication*, 3(1), 3-14.
- 蛭田由美, 久保宣子, & 山野内靖子 (2017). 看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究－わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態－. 八戸学院大学紀要, 54, 39-54.
- 法務省 (2019). 報道発表資料「平成30年末現在における在留外国人数について」[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00081.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html), (2019. 10. 23 閲覧)
- 小林文生. (2013). 短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して. 一橋大学国際教育センター紀要, 人文・自然研究, 7, 162-185.
- 工藤和宏. (2009). 日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果：グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察. スピーチ・コミュニケーション教育, 22, 117-139.
- 日本政府観光局 (2019). 報道発表資料平成31年1月16日「訪日外客数(2018年12月および年間推計値)」[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/190116\\_monthly.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/190116_monthly.pdf), (2019. 10. 23 閲覧)
- Papadopoulos, I., Tilki, M., & Lees, S. (2004). Promoting cultural competence in health care through a research based intervention in the UK. *Diversity in Health and Social Care*, 1(2), 107-115.
- 鈴木ゆみ, & 齊藤誠一 (2016). 異文化間感受性尺度 日本語版作成の試み. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(2), 39-44.
- 戸田登美子, & 丸光恵. (2018). 海外研修前後における異文化間感受性の変化. 甲南女子大学研究紀要. 看護学・リハビリテーション学編, (12), 37-44.
- 山本志都, & 丹野大. (2002). 異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory) の日本人に対する適用性の検討：日本語版作成を視野に入れて. 青森公立大学紀要, 7(2), 24-42.
- 山本志都. (2014). 文化的差異の経験の認知：異文化感受性発達モデルに基づく日本の観点からの記述. 多文化関係学, 11, 67-86.